

【東鑑】云、元久二年六月二十二日、戊申、快晴、寅剋鎌倉中、驚遽、軍兵競走于由比濱之邊、可被誅謀叛之輩、畠山六郎云云、依之奉仰以佐久間太郎等、相圍重保之處、雖爭雄雌、不能破爭多勢、主從共被誅云云、又畠山次郎重忠參上之由、風聞之間、於路次可誅之由、有其沙汰、相州已下被進發、軍兵悉以從之、仍少祇候于御所中之輩、于時間注所入道善信、相談于廣元朝臣云、朱雀院御時、將門起於東國、雖隔數日之行程、於洛陽猶有如固關之構、上東西兩門（元士門也）始被建扉、矧重忠之莅來近所歟、盍廻用意哉云云、依之遠州候御前給、召上四百人之壯士、被固御所之四面、次軍平等進發、

【東鑑】に云う、元久二年六月の二十日あまり二日戊申の日。快晴。

寅の剋（午前四時頃）、鎌倉中驚遽し、軍兵由比の浜の邊に競い走る。謀反の輩、畠山の六郎を誅せらるべしと云々。これによつて仰せを奉り、佐久間の太郎等をもつて重保を相圍むのところ、雄雌を争うといへども、多勢を破るに能わず、主従共に誅せらると云々。また畠山の次郎重忠、參上の由、風聞するの間、路次において誅すべきの由、その沙汰あり。相州（北条義時）已下進發せらる。軍兵ごとくもつてこれに従う。よつて御所中に祇候する輩、少なし。時に問注所（三善の入道善信、大江の廣元朝臣）に相談して云わく、朱雀院の御時、平の將門、東國に起り、数日の行程を隔つといへども、洛陽においてなお固關のごときの構えあり。上東・上西の兩門始めて扉を建てらる。いわんや重忠すでに近き所に蒞み來らんか。なんぞ用意を廻らさざんやと云々。これによつて、遠州（北条時政）御前に候じ給い、四百人の壯士を召し上せ、御所の四面を固めらる。次に軍兵等進發す。

大手大將軍相州也、先陣葛西兵衛尉清重、後陣堺平次兵衛尉常秀、大須賀四郎胤信、國分五郎胤通、相馬五郎義胤、東平太重胤也、其他足利三郎義氏、小山左衛門尉朝政、三浦兵衛尉義村、同九郎胤義、長沼五郎宗政、結城七郎朝光、宇都宮彌三郎頼綱、筑後左衛門尉知重、安達藤九郎右衛門尉景盛、中條藤右衛門尉家長、同苅田平右衛門尉義李、狩野介入道、宇佐美右衛門尉祐茂、波多野小次郎忠綱、松田次郎有綱、土屋彌三郎宗光、河越次郎重時、同三郎重員、江戸太郎忠重、澁河武者所、小野寺太郎秀通、下河邊庄司行平、園田七郎、并大井、品河、春日部、潮田、鹿島、小栗、行方之輩、兒玉、横山、金子、村山黨者共、皆揚鞭、關戸大將軍式部丞時房、和田左衛門尉義盛也、前後軍兵如雲霞兮、列山滿野、

おおて だいしやうぐん せんしゆ 先陣は葛西兵衛尉清重、後陣は堺平次
大手の大將軍は 相州(北条義時)なり。 先陣は葛西兵衛尉清重、後陣は堺平次
ひやうあひしやうつねひで おおすが 大須賀の四郎胤信、國分の五郎胤通、相馬の五郎義胤、
兵衛尉常秀、 大須賀の四郎胤信、 國分の五郎胤通、 相馬の五郎義胤、
ひがし へいたしげたね あしかが 足利の三郎義氏、 小山左衛門尉朝政、 三浦
東の平太重胤なり。 そのほか、 足利の三郎義氏、 小山左衛門尉朝政、 三浦
ひやうらのじやうよしむら おなじ 兵衛尉義村、 同く 九郎胤義、 長沼の五郎宗政、 結城の七郎朝光、 宇都宮の
兵衛尉義村、 同く 九郎胤義、 長沼の五郎宗政、 結城の七郎朝光、 宇都宮の
やまがらうのよつな あつこしえむんのじやうともしげ あだち 安達の藤九郎右衛門尉景盛、 中條右衛門尉
彌三郎頼綱、 筑後左衛門尉知重、 安達の藤九郎右衛門尉景盛、 中條右衛門尉
いえなが おなじ 家長、 同く 苅田平右衛門尉義李、 狩野の介入道、 宇佐美右衛門尉祐茂、 波多野
の 小次郎忠綱、 松田の次郎有綱、 土屋の彌三郎宗光、 河越の次郎重時、 同く
の 小次郎忠綱、 松田の次郎有綱、 土屋の彌三郎宗光、 河越の次郎重時、 同く
さんざうしげかず えと 三郎重員、 江戸の太郎忠重、 波河の武者所、 小野寺の太郎秀通、 下河邊の庄司
ゆきひら そのだ 行平、 藪田の七郎、 ならびに 大井・品河・春日部・潮田・鹿島・小栗・行方の
ともから こたまた 輩、 兒玉・横山・金子・村山党の者ども、 皆鞭を揚ぐ。 關戸の大將軍は
式部の丞時房、 和田左衛門尉義盛なり。 前後の軍兵 雲霞のごとくにして
山に列なり 野に満つ。

午尅著於武藏國二俣河、相逢于重忠（重忠） 去十九日、出小倉郡菅屋館、今著此澤也、折節舍弟長野三郎重清、在信濃國、同弟六郎重宗、在奥州、然間相從之輩、二男小次郎重秀、郎徒本田次郎近常、榛澤六郎成清、已下百卅四騎、陣于鶴峰之麓、而重保今朝蒙誅之上、軍兵又襲來之由、於此所聞之、近常成清等云、如聞者討手不知幾千萬騎、吾衆更難敵件威勢、早退歸于本所、相待討手、可遂合戰云云、重忠云、其儀不可然、忘家忘親者、將軍本意也、隨而重保被誅之後、不能顧本所、去正治之頃、景時辭一宮館、出途中伏誅、似惜暫時之命、且又兼似有陰謀企、可耻賢察歟、尤可存後車之誠云云、爰襲來軍兵等、各懸意於先陣、

午の尅（正午）、武藏の國二俣河に著し、重忠に相逢う。重忠は去ぬる十日あまりこのか、小倉郡菅屋の館を出でて、今この澤に著くなり。折節舍弟の長野の三郎九日、小倉郡菅屋の館を出でて、今この澤に著くなり。折節舍弟の長野の三郎重清は、信濃の國にあり。同く弟の六郎重宗は奥州にあり。しかる間、相從う輩は、二男小次郎重秀、郎從の本田の次郎近常、榛沢の六郎成清、已下、百三十四騎、鶴峯の麓に陣す。しこうして重保今朝誅を蒙るの上、軍兵また襲い來るの由、この所において聞く。近常、成清等云はく、聞くがごとくんば、討手幾千萬騎を知らず。わが衆さらに件の威勢に敵しがたし。早く本所に退き帰り、討手を相待ちて合戦を遂ぐべしと云々。重忠云わく、その儀然るべからず。家を忘れ親を忘るるは將軍の本意なり。隨つて重保誅せらるるの後は、本所を顧みるに能わず。去ぬる正治の比、梶原の景時一の宮の館を辞し、途中において誅に伏す。暫時の命を惜しむに似て、かつはまた兼ねて陰謀の企あるに似たり。賢察を恥づべきか。もつとも後車の誠と存ずべしと云々。ここに襲い來る軍兵等、おのおの意を先陣に懸け、

欲貽譽於後代、其中安達藤九右衛門尉景盛、引卒野田與一、加治次郎、飽間太郎、鶉見平次、玉村太郎與藤次等畢、主從七騎進先登、取弓挾鏑、重忠見之、此金吾者弓馬放遊舊友也、拔萬人趣一陣、何不感之哉、重秀對於彼、可輕命之由加下知、仍挑戰及數反、加治次郎宗季已下、多以爲重忠被誅、凡弓箭之戰、刀劍之諍、雖移尅、無其勝負之處、及申尅、愛甲三郎季隆之所發箭、中重忠(年四十二)之身、季隆即取彼首、獻相州之陣、爾之後、小次郎重秀、(年二十三母右衛門尉遠元女)并從等自殺之間、緯屬無爲云云、

ほまれこうだいのこのこ
譽を後代に貽さんと欲す。その中に、安達の九郎右衛門尉景盛、野田の與一、
かじ じゅう、飽間の太郎、鶴見の平次、玉村の太郎、與の藤次等を引卒し畢わり、
しゅじゅう しちきせんとう、主從七騎進先に進み、弓を取り鏑を挟む。重忠これを見て、この金吾(安達の藤
九郎右衛門尉景盛)は弓馬放遊の旧き友なり。萬人に抜んで一陣に赴く。何ぞこれを
かん せざらんや。重秀 彼に對して命を輕んずべきの由、下知を加う。よつて挑み戦
ふこと數反に及ぶ。加治の次郎宗季已下、多くもつて重忠がために誅せらる。
およそ弓箭の戦い、刀劍の諍い、尅を移すといへどもその勝負なきのところ、
申の斜(午後五時頃)に及びて、愛甲の三郎季隆が發つところの箭、重忠が身に中る。
重忠 四十あまり二歳なり 季隆 即ち彼の首を取りて、相州(北条義時)の陣に獻ず。しかる
のち、小次郎重秀 二十あまり三歳なり母は右衛門尉遠元が女ならびに従等、自殺するの間、
緯無爲に屬す。

読み下しと振仮名付けは、「全訳吾妻鏡」新人物往来社(昭和52年刊)を参考にした。
新人物往来社版は、風土記稿とは採用された原本が異なるため、一部記述が異なる。